

2021年度 独創的研究助成費 実績報告書

2022年 3月30日

報告者	学科名	看護学科	職名	教授	氏名	森永 裕美子
研究課題	独居高齢者のセルフ・ネグレクト支援における民生委員の役割意識と困難感に関する研究					
研究組織	氏名	所属・職	専門分野	役割分担		
	代表	森永 裕美子	保健福祉学部看護学科教授	公衆衛生看護学	研究総括、研究進行管理、論文作成支援	
	分担者	岡 真智子	保健福祉学研究科看護学専攻	広域看護学講座	研究進行、データ収集、データ分析、論文作成	
		松岡 佑季	保健福祉学研究科看護学専攻	広域看護学講座	調査協力、論文作成支援	
研究実績の概要	<p>【目的】 本研究は、独居高齢者のセルフ・ネグレクト（以下、SN とする）支援に対する民生委員の役割意識と困難感の実態把握およびソーシャル・キャピタル（以下、SC とする）と困難感の関連性を検討することを目的とした。</p> <p>【方法】 岡山県内の民生委員を対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、基本属性、SN 支援の役割意識、SC の豊かさ、SN 支援の困難感を尋ねた。分析は、因子分析やχ^2検定、t 検定及び分散分析、相関分析により検討した。</p> <p>【結果と考察】 コロナウイルス感染症の影響で、総会及び役員会、定例会が中止となっていたため、研究者らが直接会議の場へ赴いての配布ができず、岡山県内の民生委員所管部署 14 か所へ調査票を一括送付した。所管部署から、可能な方法で各民選委員へ調査票の配布をしていただき、回答は民生委員から個別に郵送で返送いただいた。</p> <p>民生委員への配布数 2,198 件、回収数 1,152 件、有効回答数 817 件（有効回答率 70.92%）であった。SN 支援の役割意識では、SN 対応経験がある人の方が直接的に支援しようとする割合が多く、SN 対応を経験することにより SN を身近な問題として受け入れやすく直接的に関わろうとする意識を持つと推測される。</p> <p>相関分析では、SC と SN 支援の困難感には弱い負の相関を示し、SN 支援の困難感の因子である【情報共有や関係機関との連携の困難さ】と SC の因子である【担当している地区の人々のつながりへの認知】、【担当している地区の専門職への信頼】、【担当している地区の人々との親交】は弱い負の相関を示した。SC の豊かさは、情報共有や関係機関との連携が行いやすく、SN 支援の困難感を減少させる一つの因子となりうると考えられる。</p>					

<p>研究実績 の概要</p>	<p>【結論】</p> <p>独居高齢者の SN 支援における民生委員の役割意識は、SN 対応経験の有無によって異なる可能性が示唆された。また、SN 対応における知識や経験値、連携体制の不足が、独居高齢者の SN 支援における民生委員の困難感につながっている可能性が示唆された。SC と独居高齢者の SN 支援における民生委員の困難感の関連では、SC の豊かさと困難感の間に負の相関が示された。下位因子との関連では、認知的 SC と【情報共有や連携の困難さ】の間に負の相関が示された。独居高齢者の SN の早期発見・支援に取り組みやすい地域にしていくには、地域内のつながりはもちろん民生委員と住民・関係機関のつながりを強め、民生委員だけでなく住民・関係機関を含めた関係者に早期 SN 支援の必要性について問題提起をしながら情報共有・連携しやすい体制を整えていく必要がある。そのために、日ごろから民生委員・関係機関も含めた地区の人々がつながることができる場づくりや、SN 支援における情報共有や連携に関する仕組み・ルールの整備が必要であると考え。また、今後、民生委員が実際に SN 状態にある独居高齢者に直面した際、対応していくことができるように民生委員が SN についての知識や関わり方を実際に学び、考えることができるような研修の場が必要であると考え。</p>
<p>成果資料目録</p>	<p>特記なし</p>